

「**苦しみから生まれるもの**」 使徒言行録 16：25～34

I 導入部

おはようございます。10月の第三日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

昨日は、青葉台教会創立50周年記念コンサートが行われました。ユーオディア・アンサンブルの6名の方々の素晴らしい演奏に、神様のみ名をあがめました。私は、牧師室でリハーサルも聞けたので、2倍の祝福でした。お祈りして下さい、協力して下さい、ご奉仕して下さい、参加して下さいの方々に心から感謝致します。

今日は、午後から創立50周年記念五島キリシタンの旅の報告会がありますので、ぜひ、ご参加下さい。来月には、創立50周年の記念礼拝と記念講演会がありますので、祈り、案内し、出席して、創立50周年の感謝の時を持ちたいと思います。

私たちの人生には、祝うべきことがあります、うれしい事も楽しい事もあります。けれども、悲しむべきこと、つらい事、苦しむことがあります。人生で、楽しい事ばかり、うれしい事ばかりを追い求めやすい私たちですが、苦しい事や悲しい事を通して得ることがあることを聖書は私たちに伝えているのです。

鼻歌と言いますが、鼻歌とは、「**鼻にかかった小声で歌う歌。気分の良い時など、口を閉じたまま歌う歌**」とありました。皆さんは、気分の良い時は、どのような鼻歌を歌うでしょうか。演歌という人もいるかもしれません。海外の歌でしょうか。各時代でヒットした歌でしょうか。クリスチャンの方なら、賛美歌という人もいるでしょう。気分のいい時には、鼻歌もでるでしょうが、苦しい時、悲しい時、歌うということは至難の業です。

今日は、使徒言行録16章25節から34節を通して、「**苦しみから生まれるもの**」という題でお話しします。

II 本論部

一、苦しみの中にも神のみこころがある

パウロとシラスは、ビティニア州に入ろうとしましたが、聖霊に禁じられました。それで、トロアスに行った時、その夜にパウロは、「**マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください**」というマケドニア人の幻を見ました。パウロは、マケドニアに行くことが、神様の導きと確信して、マケドニア州の第一の都市、フィリピに来たのです。

そこでは、パウロの話聞いて、紫布を商うリディアと家族が救われて洗礼を受けたのです。幸先のいいスタートを切ることができました。これは、まさしく神様の導きだと喜んだのでした。

ところが、占いの霊に取りつかれている女奴隷が、パウロたちの後ろについて、「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」と幾日も繰り返したので、パウロは、たまりかねて、「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出ていけ。」と命令すると、霊が女奴隷から出て行ったのでした。すると、この霊に取りつかれている女奴隷によって金儲けをしていた主人たちは、金儲けができなくなったので、パウロとシラスを捕らえて、役人に引き渡し、「彼らが、町を混乱させ、ローマ帝国に市民が受け入れられない風習を宣伝している」と訴え、群衆も責めたので、高官たちは、パウロとシラスの衣服をはぎ取り、鞭で何度も打ち、牢に投げ込み、嚴重な見張りをつけたのです。

神様の導きだと信じ、確信してフィリピに来て、リディア家族が救われ、洗礼を受けて、これは行けると思った途端に、パウロとシラスは、捕らえられ、鞭打たれ、牢にぶち込まれたのですから、「どうしてこうなるの！」「なぜ、こんな目に遭うのか」ということです。このような苦しみに遭うのは、神様のみこころではなかったのではないかと疑ってしまっても仕方のないような状況でした。

私たちも、信仰生活の中で何かうまくいっている。調子がいい。これは行ける、と思うような良い環境や状況に置かれると安心し、前向きになれます。けれども、悪い事が起こったり、嫌な経験をしたり、自分の思い通りにいかないと、なんだ、神様は助けて下さらないのか。共におられないのか、と感ずることがあるのかも知れません。神様のみ心は、神様の導きは、私たちの状況に左右されるものではありません。私たちの状況が良くても悪くても、成功しようが失敗しようが、神様のみ心はなされるのです。私たちは、私たちの状況が苦しい時、悲しい時、痛む時も、神様のみ心がなされるということを経験する者でありたいのです。苦しみを通して、神様のみ心が示されることはあるのです。

二、福音はとどめられることがない

パウロは、フィリピに来たことが神様のみ心であると確信しながらも、苦しみを受けた時、神様の愛を疑うような思いに捕らわれたのでしょうか。神様に不平や不安でいっぱいになって機嫌が悪くなり、腹を立てたのでしょうか。

聖書を見ると、25節ですが、「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。」とあります。詳訳聖書には、「賛美の歌をうたい続けており」とあります。

パウロとシラスは、何度も何度も鞭打たれました。背中から血がにじみ出ていたでしょう。背中がはれ上がり痛みで苦しかったはずですが、また、自分たちが何か悪い事をしたのなら、まだしも。女奴隷の霊を追い出して金儲けできなくなったという理由で、理不尽な苦しみを受けたのです。文句を言うならば、いくらでも言うことができたでしょう。自分たちを鞭打ち、牢に入れるという命令を出した高官を憎むこともできた。自分たちを訴えた女奴隷の主人たちを憎むこともできた。自分たちを追い詰めた群衆を憎むこともできたはずですが。そして、このような状況の中で、そのようなむち打ちや牢に入れられることから守って下さらない神様に向かって、つぶやいたり、非難することもできたはずですが。

しかし、パウロとシラスは、真夜中であるけれども、賛美の歌を歌ったのです。人を憎んだり、神様につぶやくのではなく、神様を見上げて、賛美の歌を歌い続けることができたのです。なぜ、パウロとシラスは、このような苦しみの中であって、神様を見上げ、賛美をすることができたのでしょうか。

パウロはテモテの第二の手紙2章9節で、「この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。」と言っています。パウロは、今回のように捕らわれた経験が何度かありました。パウロが捕らえられたのは福音のためでした。

かつては、この福音に敵対して歩んでいたパウロでした。クリスチャンをとらえ、イエス様に逆らっていたパウロは復活のイエス様に出会い、悔い改めて、イエス様を救い主として受け入れ、クリスチャンとなりました。神様はパウロを異邦人伝道のために選ばれ豊かに用いられたのです。いくらパウロがクリスチャンを迫害しようとも、神の導きで、神の言葉は伝えられ、福音は止まることを知らなかったのです。パウロ自身が経験したように、神の言葉はつながれることなく、福音は広がるのです。そのために、今もパウロは福音のために捕らえられている。パウロにとっては、どのような苦しみを経験しようとも、神様のみ業がとどまることがないことを彼自身確信していたのです。いや、苦しみを通して神様のみ業をなして下さることを信じていたのです。

だからこそ、賛美することができたのではないのでしょうか。私たちも、苦しみや悲しみを経験します。けれども、苦しみや悲しみを通して、神様は神様ご自身のみ業をなさることを信じて、神様を見上げて歩みたいと思うのです。

三、苦しみが神のみ業を産む

パウロとシラスが、そのような状況で賛美していると、他の囚人は聞き入っていました。すると、突然大地震が起こり、牢の土台が揺れ動き、牢の戸がみな開き、全ての囚人の鎖が外れてしまったのです。普通、地震というと、家が崩れ、壁が壊れというようなものですが、それもあつたでしょうが、牢の戸が開き、囚人たちの鎖がみな外れた、というようなことは特別な事、神様の介入がそこにあつたことを示しているように思うのです。

すると、看守も地震で目が覚め、牢の戸がみな開いているので、囚人たちが全員逃げたしまったと勘違いして、剣を抜いて自殺しようとしたのです。逃げた囚人の責任を負って、自殺するというのが常でした。パウロは、「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」と言いました。驚いた看守は、明かりを手に牢に飛び込んで、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏したのです。常識を超えた経験、自分の頭では考えられないことが起こっている時の態度だと思えます。魚が獲れるはずのない時間帯に、イエス様の言葉に従って網を投げて漁をしたペトロが大漁を経験した時、ペトロは、イエス様の前にひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです。」(ヨハネ5:9)と言いました。この時の看守も、同じような心境ではなかったのでしょうか。だから、看守はパウロとシラスに言います。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」その看守に二人は言いました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」

そして、福音を語ったのです。看守は、地震が起こり、囚人が誰一人、逃げなかったという不思議な出来事で神を信じたのではなく、パウロが語る福音によって救われたのです。看守は、二人の体の打ち傷を洗い、自分も家族もイエス様を信じて洗礼を受けたのです。そして、自分の家に囚人である二人を案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともどもに喜んだのです。

パウロとシラスは苦しみました。精神的にも、肉体的にも、信仰的にも苦しみを経験しました。しかし、彼らの苦しみを通して、看守とその家族が救われたのです。看守は常に牢にいるわけですから、一般の人のように福音を簡単に伝えることはできないし、看守自身も福音を聞く機会がありません。ですから、看守に出会うためには、パウロとシラスが牢に入らなければならないのです。しかし、パウロとシラスは罪を犯すようなことはしない。であるならば、良い事をして、訴えられて、捕らえられ、牢に入るために、占いの霊に取りつかれている女奴隷の霊を追い出し、そのことによって主人たちのもうけがなくなったので、主人たちは怒り訴えたのです。人は、利害関係があれば怒るものです。神様は、看守と家族を救うために、パウロとシラスに苦しみを経験させられたたように思うのです。

神様がそのように計画しても、パウロやシラスがつぶやき、批判して、賛美をささげなければ、このようなみ業は行われなかったのです。パウロもまた、神様を信じ、神様のなさることを全面的に信じて、苦しみを通してなさる神様のみ業を信じていたのです。

私たちも、神様を信じていても、信仰があっても、苦しみや悲しみを経験します。なかなかスムーズに行かないことが多くあります。けれども、神様は私たちを愛して下さり、イエス様を十字架につけ、私たちの身代わりに裁かれ、イエス様の十字架で流された血と裂かれたその体、死んで下さったので、私たちの罪を赦し、イエス様がよみがえられることにより私たちに永遠の命を与えて下さったのです。このような愛で愛して下さる神様をパウロのように、どのような苦しみや悲しみを経験しようとも、神様の愛を信じて、神様に全てを委ねて歩ませていただきたいと思うのです。

Ⅲ 結論部

福島第一聖書バプテスト教会の牧師、佐藤彰先生は、「**苦しみから生まれるもの**」という本の中で、次のように語っておられます。「**信仰者の生涯といえどもその道程には、実に様々な苦難が幾度も幾度も押し寄せてきます。それは、当然のことながら、きれいごとではすまされない、現実の世界なのです。けれども、信仰者の遭遇する苦難で、一点、ほかと際立って違う点があります。それは、信仰者にとって信仰を持って遭遇する苦難には、どれ一つとして意味のない苦難や試練はない、ということなのです。一切はやがて必ず益と変えられていく。ここで一つの苦難に出合うことによって、自らが「また一つ着実に成長し、一回り大きくなる。そしてその結果として、次回同じような試練に直面しても、必ず乗り越えていくようになるのだ、という希望に満ちた信仰による確信なのです。**

とすれば、そのことをあらかじめ信仰によって確信する者として私たちは「もうだめだ」と、思わずあきらめのことばを吐き捨ててしまうようなその時にも、心のどこかでは、不

敵にも、信仰によって、そのことに対する主の完璧な勝利を、堅く信じていることができるのではないのでしょうか。信仰者には、「確信」の二文字はあっても、決して「絶望」の二文字はないのです。」

私たちの経験する苦しみは意味のないものは一つもありません。必ず神様が計画された恵みが隠されています。苦しみから生まれるものが確かにあるのです。それは、イエス・キリスト様にあつてのことなのです。私たちには、命まで捨てて私たちを愛して下さるイエス様がいつも共におられるのですから、この週も、イエス様に目を留めて、イエス様と共に、イエス様を信じて、苦しみを経験しようとも、イエス様を信頼して歩みましょう。